

ボランティア情報



No.417

【ボランティア情報】
昭和52年11月12日
第三種郵便物認可
平成24年2月1日発行
毎月1回1日発行

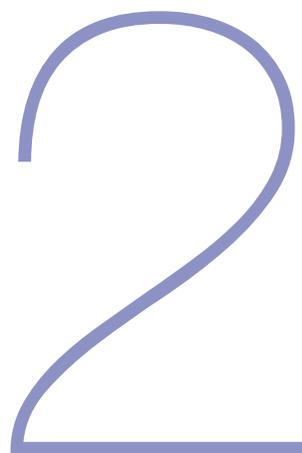
「五感で会議」を しよう!

「会議を開いたけど、誰も発言してくれない」「会議では思い通りに決まるけど、メンバーは積極的に動いてくれない」といった悩みはよく聞かれます。

さまざまな市民、団体、企業等に、主体的に意欲をもってボランティア活動や市民活動に参画してもらうことの重要性はますます増してきていますが、具体的にはどのようにすればよいのでしょうか。

会議は、どんな団体も開催しないところはないといっていいほど身近なものであり、さまざまな関係者が集う機会です。それだけに会議を有意義なものにできるかどうかによって大きな違いが生まれます。

今月号の特集では、市民参加をすすめる一つの切り口として、関係者の意欲や主体性が生まれるような会議の持ち方や、主催者の姿勢などについて取り上げます。



february



Contents

特集 「五感で会議」をしよう!	2
ボランティアの力でつながる日本～被災地の今と今後をみる～ (社会福祉法人 大熊町社会福祉協議会 武内 智恵美さん)	6
イベント助成金情報 丸紅基金「東日本大震災復興助成金(平成24年度)」募集のご案内(社会福祉法人 丸紅基金)	6
ボランティア国際年+10 ボランティア Around the World (オランダ王国) / つながって広げよう!	7
保険の広場 / CLIP BOARD / 事務局だより	8

特集

五感で会議

をしよう!

池澤 良子 さん

東京ボランティア・市民活動センター
相談担当専門員



大学卒業後、国際協力プログラムコーディネーター、米国でのアジア系女性シェルターNPOボランティアスタッフとして活動。平成12(2000)年より現職。ボランティアグループ・NPOからの設立・運営相談を担当。NPO法人設立・運営ガイダンスや、社会福祉施設・NPOにおけるボランティアの受入れ研修も行っている。センターには年間1万8千件をこえる相談が寄せられ、活動者の声をもとに情報誌「ネットワーク」において、実例によるNPOマネジメントの記事も執筆。高知県高知市生まれ。お寺、神社、街道、古い街並みが好き。

吉田 理映子 さん

特定非営利活動法人 ハンズオン! 埼玉
副代表理事/全社協全国ボランティア・
市民活動振興センター広報委員



大学卒業後、広告代理店に勤務。企業の広告戦略の企画立案、制作実施を担当。倉本聰氏(「北の国から」の脚本家)の「広告制作参加型プロジェクト」などに携わる。「市民が、小さな声でも、まとまらなくてもいいから、自分で伝えることは面白い。」を基本的考え方としている。全国のNPO、NGO、社協、および、大学、専門学校などで「市民活動がつくる新しい広報講座」の講師や広報会議などの進行役を務めている。
埼玉県育ち、浦和在住。夏は家族と北海道富良野で畑仕事をしている。



「五感で会議」に

吉田 ここはすごくピシッとした会議室のセッティングなので、緊張しますね。

池澤 吉田さんって、いろんなところで会議をされているそうですね。

吉田 はい。私は企業にいるときに叩き込まれた癖で、今でもどこでどんなセッティングで会議をするかは、がんばって決めているんです。テーマやクライアントによって、ホテルでやるの

か、居酒屋でやるのか、どんな服を着るのか等々、出席者が頭でなくて、リアルに考えられるよう「五感で感じる会議」をいかにつくるかを考えます。例えば、子どもが対象の会議では、関係の資料を用意するだけでなく、子どもの流行の歌などを調べて会議のときに流したり。

また、以前に、会議で大変反省したことがあります。東海村の臨界事故で被害に遭ったお母さんに来て話をしていただいたのですが、はじめこちらの都合で会場等をセッティングしたところ、「その空気では話せない…」と。立派なコミセンのお部屋でした。確かに会議の場で理路整然と話せるのは、会議に慣れている人しかできませんよね。そのお母さんが自然に話せる場づくりを、私は必死にやっていたんです。よい意見だけをもらおうとしていた私は会議に対して

非常に傲慢でした。お母さんと話し合うなかで、そのときは場所を変更し、幼稚園のお部屋で床にみんなであるく床に座ってお話していただきました。

池澤 私は、参加者が会議室に入ったとき、目につくところに、「ようこそ、〇〇〇へ」とか、絵や音符を書くことがあります。どんな雰囲気のものなのか、どんな会議をしたいのか、ということを表現するために。入って来た人が、席に着いて待つ間、リラックスできたり、少し楽しくなってほしいな、と。

吉田 あ、それいいなあ。私も、参加者の「ギア」を合わせるためにスタッフどうして話し合います。「この会議はこのトーンなのだな」とか思ってもらうためです。そういった「ようこそ」の雰囲気がなければ、かしこまった「背広を脱がない」立場で、会議でも話してしまいますよね。だから みなさんもいろいろ工夫なさっていますよね。

この場を、これからカフェ風に直してみまじょうか。



殺風景な会議室

～セッティング変更～

吉田 例えばこれは、1枚の「魔法の布」です。こんなふうにテーブルに1枚の布を掛けるだけで、会議室のかたーいイメージを払拭できるので、うちの団体ではいろんな柄を用意してます。真ん中にちょっとした物を置いたり、お菓子などもね。

池澤 確かに、さっきの四角いテーブルよりも、丸いテーブルになったほうが、私もリラックスして笑顔が増えていような気がします。お菓子もその人が喜ぶだろうと、用意してくださったことが分かるとうれしい。

参加したいと思える 会議に

池澤 NPOやボランティアって、社会にかかわる人を増やそう、ということですよ。そのためにはまず、みんながかかわる会議にすることが大事。今日はこういうきれいな布を吉田さんが持ってきてくださったから、次は私がこれを持って行こうとか、美味しいお菓子をもらったから、持って行こうかと思うと、どんどん、その団体が好きになるし、会議が好きになるんじゃないかと。

立場を離れた人間に

吉田 さまざまな会議にお邪魔しているつも思うことは、会議の最初に、参加者を「ボランティア」ではなく、一人の人間にすることが大切だと感じます。自分は「ボランティア」だという立場や役割の意識が強いと、理想の「ボランティア像」に沿って、理性的に話さなければ、といった思いにとらわれてしまいます。そこを外してもらうために、役割から離れた共通の話題を初めにしてもらったりします。例えば、「皆さんが小学校のときに、いちばん好きだった場所はどこですか？」といった

話題をすると、みんな小学生時代があるので話し易く聴き易いんですね。

あとは、池澤さんはよくご存知の通り私たちは「被り物」を被って会議をしたりしてるんですよ。例えば「ヤキイモ」型の被り物をしてもらうのですが、そうすると普段の役割から離れて、その人らしい発言するようになったりします。

池澤 ところで、今日はどうしてエプロン姿なんですか？（笑）

吉田 これもよく使う道具です。本当は年配の男性がすると、なごむ効果がさらにアップします（笑）。

お客様にしないで

池澤 地域のさまざまな団体や市民と会議するときなど、きちんと会議室の準備をしておかなければ、と思いがちですが、地域課題を解決するための参加型のプロジェクトなのだとすると、いっしょに会議室のセッティングや後片付けをするなど。会議も参加型がいいですね。

吉田 お茶一つにしても、参加者に自分で入れてもらうかどうか。うーん。もちろん、きちんと準備をしておいたほうが、恰好はいいのですね。でも、いっしょにまちをつくる仲間であれば、それは少し違うような。参加

者は、お客様として扱われることで、「意見を言わせていただきます」という姿勢になりがちだと自分の反省とともに思います…。

池澤 市民活動は動く人が増える、ということが大事ですが、それを会議の場から実践するというのでしょうか。自分自身のことを省みて、頭だけでなく感じると動く、変わるということが多かったように思います。

吉田 だからこそ、会議は「五感」で。感じれば人は必ず動く。それは会議の場でもそうですよね。

池澤 市民活動のマネジメントは、「共感のマネジメント」って言われるんですね。

会議は「たき火」

吉田 また、自分が進行役でなくても、この会議をどうやって温かくしていくかということは参加者みんなにかかわってるんですよ。会議は、「たき火」みたいののだと思います。火が燃えるためには、例えば「そうだね」という一言によって、「消えそう」と思っていた火に風を送ったり、枝をくべるのが大事なんでしょうね。相槌一つもない状況は、いわばたき火に水をかけてる感じ?! うわ〜つい反対意見に対して、私もやってしまってるかも…ごめ



カフェ風に変ったセッティング

んなさい。(おじぎ)

今日も苦しんでいるその子、今日も虐待を受けているあの人、仮設住宅で寒いなど思っている人たちと、つながるために会議をしているのに、その人たちのことを忘れてしまうと、自分たちの都合で会議をしてしまいがちですね。会議のメンバーはそうした誰かのためのチームであるはずなのに。会議のなかで、今は決めるところだなとか、こうすればもっとアイデアが膨らむのではないとか、それを参加者が常に自分の役割として考えていくことが大事ではないでしょうか。

「ラブレター」は誰に

吉田 会議は、みんなで企画というラブレターを書くようなものだと思います。でも最終的に誰に届けるものかを忘れて、自分の意見を言うための会議になってしまうことないですか？ 私たちの見えないところで苦しんでいる方に届けるためだ、ということに常に意識することを自分に言い聞かせるようにしてありますが…それでも…。

池澤 例えば、福島県の支援をしているあるNPOは、いろいろなことを決めるときに、常にそこに福島県に住んでいるある人がいる、と思って会議をする、というお話を聞きました。

吉田 広報講座に何うと、広報の対象を「誰に」と絞ることが苦手な参加者が非常に多いです。つい「地域の人に」とくくってしまうと、伝えたい相手がぼやけます。会議も同じで、例えば、「被災者」といっても、地域や状況によって全然違います。「あの人」を意識することがすごく大事で、それが明確になるとこちらの真剣度が変わってくるのは実感します。

池澤 一人に絞ることでその方以外が対象にならないように感じてしまうのかも。

吉田 お気持ちはよく分かる。誰か

「ひとりに」って不安ですよ。でも「みんなに」「平等に」しようとすると、企画力や会議力は下がります。漫然とするので、対象に届くのかという実感も得られません。例えば、手前味噌ですけど、私たちの団体の「ヤキイモタイム」(「ボランティア情報」No.414・平成23年11月号参照)という事業は、15,000人の方が参加して、行政のお金を遣って実施していますが、この事業には、明確に一人のターゲットがあります。「あの人」に向かって、この企画を立てるということ、みんなが実感してやらせていただいています。

実り多い会議にするために



徹底的に「書く」

吉田 会議の時間が限られているときは、時間を決めて、まずは、徹底的に書きます。同じことを2度言うことが少なくなりますね。私なんか話が外れそうになったり、繰り返しになったりしやすいタイプで…「ごめんね、今の話はこっちなのだよね」など、書いたもの指して話を元に戻していただく、はっと気がつきます。

会議のときには、ホワイトボードと大きな模造紙、A4の白紙やプロッキー、セロテープは必須アイテムですね。喫茶店で、会議をするときでも、箸袋やナプキンに書いて、結露の窓に貼ったりしてます。ふふう。そうすると、みんなの大事な言葉が流れないから。

池澤 場づくり、議題や資料を準備する、今日は何をどこまで決める、決まったことを確認して終わる、という会議の仕方を少し知るだけで、会議がずいぶん変わったという団体の声を聞きます。

自分たちでルールを決める

池澤 会議をするとき、みんなが見える場所に、「後で言うなら、今言おう」

など、標語を書いている団体もあるそうですね。

吉田 確かに、そうすると会議のなかでルールを思い出すきっかけになりますよね。「あっ、やっちゃった」とか。そうした、決め事によって、それぞれの団体やグループの「文化」ができるのですね。ただし、そうしたルールは、自分たちで決めることが効果につながるのだと思います。

池澤 決めるプロセスに自分たちがかわっているということ、言い続けるということ、文化ができていく。私たちの団体は会議の準備をする、人の話を聞く、自分の言いたいことを言える、という文化がある、なんてすてきな団体。

責任をつくり合う

池澤 私自身、会議で発言することは、すごく勇気があることで、発言したことで責任を負わされる、と黙ってしまうこともあります。「私は」とは言わずに、「社会が」とか「他の人が」と言ってみたり。

吉田 それは、言っているのは「私ではないですよ」ということですよ。会議で一番大事なことは、「責任をつくり合う」ということでは？ すべて発言した人がやらなければいけなくなると発言しにくくなります。

今、「社会のなかにいかに責任をつくり合うか」ということがすごく問われている、とよく団体内でも話します。だからこそ、会議においても、みんなで決めたのだから、みんなに責任があるという関係をつくっていく。それが社会だと思います。

そのためにも、全員が「ここに来てよかった」と思い合える会議をつくるのが、その第一歩なのだと思います。だからいつも悪戦苦闘です。

池澤 今日、さまざまなことが話に出ましたが、すべてを一度に変えることは難しいですよ。一つでも、少しずつでも変わっていくといいですね。

青木将幸ファシリテーター事務所代表
青木将幸さんからのコメント

ここがキモ!



青木さん プロフィール

和歌山県新宮市出身。環境NGO・A SEED JAPANにおいて、さまざまな環境活動にかかわる傍ら、「それぞれの持ち味が発揮される組織づくり」「学び合い、育ち合う場づくり」に関心を寄せる。平成7(1995)年よりNPOにかかわる若者向けの団体運営トレーニングの開発と実施に関わる。5年間の企画会社勤務ののち、平成15(2003)年に青木将幸ファシリテーター事務所を設立。以来、さまざまな会議やワークショップの進行役を務めており、この道のエキスパートであり、パイオニア的存在。「日本を市民社会にするにはプロ意識と志をもったファシリテーターが3万人は必要」というのが持論。

会議を活性化する簡単で重要なポイント

お二人の対談、とても楽しく拝見しました。会議をたき火で例えるというのは、まさにそうだと思います。お堅い会議で、大量の資料を配り、事務局が延々と説明していくというパターンを見かけますが、あれは明らかに「温度を上げる」工夫をしてない例ですね。このやり方では、参加者の意見や意欲を引き出すということは、困難になっていきます。

会議を活性化する、簡単で重要なポイントは「なるべく早く、参加者全員が口を開ける機会をつくる」ではないかと思います。まず、参加する一人ひとりが、口を開くことが肝心です。自分が何かを発するという事は、主体的にその場にいるスイッチが入ることにつながります。自分の名前と、何か一言をぐるっと回してもいいですし、今日の会議に対して持つ思いを語ってもらってもよいです。「時間がかかる」と敬遠する人もいま



ワークショップの風景

すが、僕の実感では、それ以上に「効果が高い」と見ています。

会議を効果的に運営するためのツール

会議を効率的に運営するためのツールとして、有効なのは「時を知らせる」何かです。ストップウォッチや、鐘のようなものでも構いません。ある程度の時間が経つてくると、人は時間の感覚を失います。しかし、限られた時間で、いくつかのことをこなしてゆく必要があります。一つの議題に30分ほどかけようと思っていたら、15分経ったところで、ちりーんと、鳴らしてみましょう。自然と、議論がまとまる時間帯に向かっていきます。大事なものは、全員が時間のことを意識する、ということです。鳴らしすぎず、忘れたところにちょこっとやるのが効果的です。

堅いときほど「ほぐし」と「問いかけ」が大事

お堅い雰囲気での会議の場で、重要になってくるのは「ほぐし」と「問いかけ」です。堅い雰囲気であればあるほど、人は「ほぐれる何か」をありがたく思うものです。ちょっとした季節の挨拶や、冗談や、

合いの手が、人びとの心をほぐしていきます。そして、ほぐれたところから、有意義な意見交換が生まれやすいのです。ほぐすというのは、たき火で言うところの、薪と薪の間に空気を入りやすくするという作業ではないかと思います。風通しのよい会議をつくるためには、必須の作業となります。

フォーカスが明確な問いかけを

次に重要なものは、フォーカスが明確な問いかけです。今、話し合おうべき点を、問いのカタチで全員に示してみましょう。「シンポジウムについて」と示すより「シンポジウムで今こそ取り上げたいテーマは？」と問いかけたほうが、人びとの頭が明確に動き始めます。よき問いかけができるよう、事務局、進行役、いち参加者ともども、力をつけたいものです。